JOYAMA

通信 Joyama News

福岡教育大学広報誌

Fukuoka University of Education Campus Magazine

vol. 34

2015 Autumn

特集1
入試改革

特集2
クアラルンプール短期研修

豊かな教養と高い専門性をつちかう

福岡教育大学

vol. 34

CONTENTS

02 特集1
入試改革

06 特集2
クアラルンプール短期語学研修・
インターンシップ研修

08 福教大NEWS

14 授業紹介
中等理科教育演習Ⅱ（甲斐初美准教授）
総合学習教材開発B（冨安浩樹教授）

16 研究室紹介
社会科教育講座　小森 雅子研究室

17 サークル紹介
球ちゃん（アルティメットサークル）
落語研究会

18 社会連携 連載第12回

20 福教大卒OB・OG
直方市立福地小学校教諭
西村 仁志さん

遠賀町立遠賀中学校教諭
福本 貴史さん

22 TOPICS
女子寮と男子寮に学習室が整備されました
表紙モデルの福教大生☆

23 キャンパスからの便り

特集1

入試改

これまでにお知らせしていますとおり、本学は、義務教育諸学校に関する教員養成機能におけとをミッションに掲げており、今後の各県・地域の学校教育を担う、資質・能力の高い小学校教員、特別支援学校教員等を養成してまいります。このため、平成28年度から教育学部及び大学人員及び入学者選抜方法の変更を行う予定です。

教育学部の入学者選抜方法の変更内容について理解を深めていただけるよう、変更のポインたご質問に対する考え方を掲載します。

教職への高い意欲、教職を目指すうえでの基礎的な力を持つ高校生等の方々がこれらもご参レンジされることを期待します。

入試改革のポイント1

初等教育教員養成課程では、平成28年度から、これまでの選修毎の募集、入学者選抜、授業科目の履修を廃止し、募集人員を増員（316名→370名 幼児教育選修は除く。）したうえで課程全体での募集、入学者選抜を実施します。

※幼児教育選修の募集人員は、現行どおり15名（推薦入試6名、一般入試（前期）9名）です。

入学者選抜方法は、推薦入試では、大学入試センター試験及び個別学力検査を免除し、推薦書、調査書、志望理由書及び面接により総合して選抜します。

一般入試（前期）では、大学入試センター試験（「5教科7科目若しくは8科目」又は「6教科7科目若しくは8科目」）と小論文の合計点で選抜します。いずれの選抜方法も現行どおりです。

（質問）

初等教育教員養成課程（幼児教育選修は除く。）に入学した後に特定教科等に係る授業科目について専門的に履修していくのでしょうか。

（本学の取組）

小学校教員は基本的に学級担任として全教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動の指導を担当し、終日、担任する学級の児童と接することとなります。このため、小学校教員の養成を目的とする初等教育教員養成課程では、特定の教科等に係る授業科目を中心に学ぶのではなく、小学校教員として各教科等の指導・学級経営・生徒指導等を行うために必要な力を全般的に高めることを目的とした教育を実施します。また、課外活動でも、英語習得院による英語コミュニケーション力向上、学校支援ボランティア活動、部活動、サークル活動を奨励し、小学校教員として必要な力を総合的に高めていきます。

（質問）

改組前の初等教育教員養成課程の教育心理学選修では、認定心理士の資格を取得できたが、改組により心理学選修がなくなると取得できなくなるのでしょうか。（心理学を専門的に学ぶことは難しくなるのでしょうか。）

（本学の取組）

平成28年度入学者から認定心理士を取得することはできません。また、教員になるための心理学に関する科目の履修は引き続き必要ですが、これまでの教育心理学選修と同程度に心理学を専門的に学ぶことはできません。

革

る広域の拠点的役割を担うこ
員、中学校教員、高等学校教
院を改組し、各課程での募集

トとこれまでに本学に寄せられ

考にしていただき、本学へチャ

平成28年度からの教育学部の新たな入学者選抜の実施について

入試改革のポイント2

初等教育教員養成課程では、予定募集人員370名のうち140名を推薦入試により募集します。小学校教員への意欲や高校生活での学業、学校行事、生徒会活動、部活動、ボランティア活動等での取組を総合的に評価します。

（質問）

推薦入試Ⅰ（地域創生推薦入試）の出願、合否決定について、

①どのような生徒を求めているのでしょうか（特に重視する能力）

②推薦条件として、評定が3.5以上となっていますが、この評定は選考の際にも判断材料になるのでしょうか。

③推薦条件として、高校で一つの科目でも評定が3未満のものがある生徒は対象とならないのでしょうか。

（本学の取組）

①本入試により入学した者は、本学卒業後は、九州・沖縄の各出身県（卒業した高等学校の所在する県）内のどの地域ででも、小学校教員として頑張っていただくことを期待します。このため、各県で小学校教員になりたいとの強い意欲・熱意・適性を持ち、全教科担任制の小学校教員としてどの教科等でも基本的な指導を行うための基礎として高等学校の全教科・科目で一定の学修をおさめ、かつ、高等学校在学中に学校行事、生徒会活動、部活動、ボランティア活動等の集団活動での調整や引率、様々な人間関係づくり等に積極的に取り組んだ生徒の受験を期待します。

②調査書については、出願要件（評定平均値）を満たしているか及び勉学意欲を判断するための資料にします。

③推薦入試募集要項の「出願要件・推薦の条件等」に掲げる「・調査書の全体の評定平均値が3.5以上の者（全ての教科で3未満のものがないこと）」の「（全ての教科で3未満のものがないこと）」は、当該生徒が履修した各教科に属する各科目の評定で2又は1がないことを意味します。

（質問）

初等教育教員養成課程の推薦入試Ⅰ（幼児教育選修除く）及び、Ⅱで課される小論文は、どのような形式になるのでしょうか。また、面接はどのような形で行われるのでしょうか。

（本学の取組）

小論文の形式は試験前は明らかにできません。

面接（口頭試問を含む。）では、志望動機や大学における学習や活動への意欲、高等学校在学中に積極的に取り組んだことなどについて自己アピールしてもらいます。また、出身県の小学校教育に関する事項について試問します。これにより、小学校教員となることへの意欲、自分の意見や考えを明確に説明しようとする表現力やコミュニケーション力等を評価します。

※推薦入試学生募集要項（本年9月公表）の「面接、小論文、実技試験の評価の観点」をご参照ください。

入試改革のポイント3

中等教育教員養成課程では、予定募集人員を理科(25名→35名)、音楽(8名→15名)、美術(8名→10名)、書道(6名→10名)の各専攻で増員するとともに、入学者選抜では、前期課程、後期課程において新たに共通の小論文を課す予定です。

(質問)

新たに課される中等教育教員養成課程の小論文の形式(内容)等についてはどのようなものか。

(本学の取組)

小論文の形式は試験前は明らかにできません。

評価の観点については、アドミッション・ポリシーに記載しています。教職への意欲、学校教育に関わる課題の理解力、論理的思考力、文章表現力等を評価します。

配点は100点です。(【入学者選抜に関する要項】参照)

※学生募集要項(本年12月上旬発行)の「面接、小論文、実技試験の評価の観点」をご参照ください。

入試改革のポイント4

特別支援教育教員養成課程では、新たに入学者選抜段階から初等教育部(特別支援学校の小学部の教員を目指して、特別支援学校教諭免許状及び小学校教諭免許状を取得)、中等教育部(特別支援学校の中学部又は高等部の教員を目指して、特別支援学校教諭免許状及び中学校・高等学校教諭免許状を取得)に分けて募集を行い、初等教育部では40名、中等教育部では20名を募集予定です。

(質問)

入学者選抜段階から初等教育部と中等教育部の区分により行う理由はどのようなものですか。

(本学の取組)

特別支援学校においても、基本的に小学部は全教科等を担当し、中学部は各教科を担当することになり、教員採用選考試験でも特別支援学校小学部と中学部、高等部の教員に区分しての選考、採用が行われております。

特別支援学校の現場では、小学校、中学校、高等学校教育を行うための力とともに、特別支援学校教諭免許状を所持して特別支援教育について専門性を持った教員が求められており、4年間をとおして各部の教員として必要な資質能力を育成していきます。

入試改革のポイント5

共生社会教育課程、環境教育課程、芸術課程では平成28年度からの学生募集を停止します。

特集2

自己の可能性を広げ、世界とつながる。

クアラルンプール短期語学研修・インターンシップ研修

クアラルンプール短期語学研修・インターンシップ研修の実施

今年は、職員研修を含む総勢10名が英語研修とインターンシップ研修に分かれて、2、3週間のプログラムに参加しました。

本学初の海外インターンシップ先は、デザイン･インテリア関連の現地企業、マーケティング関連の邦人企業で、それぞれ行く前はドキドキだったという3名、2名が、人生初体験の毎日を満喫してきました。また、英語研修組は、50人以上にインタビューし、世界各国からの留学生と忘れがたい時を過ごし、今後の決意を新たに帰国しました。

多文化ワークショップ
（インターンシップ研修参加者と講師･現地学生）

語学研修・インターンシップ研修報告

今年度の語学研修は、8月16日より2週間と3週間の日程で実施され、学生4名と事務職員1名が参加しました。

インターンシップ研修は、8月17日より2週間、学生2名と事務職員3名が参加しました。

研修に参加した学生と職員からの報告を紹介いたします!

クアラルンプール短期語学研修を終えて

初等教育教員養成課程 生活･総合選修 2年　吉丸 優麻

この3週間で、私の人生はきっと変わってしまったと思います。初めての海外でした。日本の外では、あらゆるものが今まで日本で見てきたものとは違いました。毎日が驚きの連続で、全てが刺激的でした。海外に行ってみたいという小さな好奇心が、私の見てきた世界を大きく変えました。参加することができてよかったと、心の底から思っています。

3週間通ったELCは、素晴らしい語学学校です。この学校に通えたからこそ、こんなに充実した研修を送ることができたのだと思います。学校のルールは、「ENGLISH ONLY」です。授業は、朝から夕方まであり、クラスメイトは、日本人、ロシア人、カザフスタン人、中国人などです。それらの中で最も多かったのは、サウジアラビア、イエメン、トルコといった中東の学生でした。私のクラスでは、約半数が、アラビア語を話す中東の学生でした。

授業初日に、私は最初の衝撃を受けました。「英語が出てこない」。先生が言っていることも分からないし、それを隣の留学生に聞きたくても言葉が出てこない。中学校から高校まで、あんなに複雑な文法を勉強してきたのに「何をしているの?」「どうしたらいいの?」「わからない」その言葉さえ話せませんでした。別世界にきて、ただ机に座ってカチカチに緊張して、宙に浮いているような気分でした。正直なところ、3週間やっていけるかどうか不安でたまりませんでした。だけど、そんな心配は3日経つ頃には消えていました。クラスメイトの中東の学生たちは、平気で遅刻をします。宿題もあまりしてきません。でも、日本人とは真逆で、英語をよく話します。文法は苦手だけど、どんなことでもすぐに先生に聞いて解決しようとします。授業は常に、先生と生徒のやり取りの中で活発に進んでいきます。クラスはいつも賑やかで、「英語を勉強したい」という彼らの勢いの中にいると、英語を話すことを恐れる気持ちは自然と消えていました。リスニングをしたり、テーマに沿ってグループでディスカッションをしたり、文法の練習問題を解いたり、日本と同じような授業のはずなのに、全てを英語で勉強すること、「学びたい」という気持ちを持っていること、これだけでこんなにも違う授業になるのだと驚きました。授業が楽しいと思ったのは、いつぶりか分かりません。

そんな中でも、一番印象に残っている活動は、「お互いが母国語で話す」という活動です。日本語で「タクシーはどこですか」と中東の学生に聞くと、アラビア語で説明が返ってきます。当たり前のことですが、まったく理解ができません。同じ地球に住んでいるのに、理解できないことだらけだということを改めて感じました。そして、英語を使いこなすことができれば、彼らとしっかり分かり合えるだろうということを、身をもって感じました。こんな活動は、海外だからこそできることで、すごくいい経験になったと思います。

また、そこでできた友人たちは、私にとってかけがえのない宝物です。特に中東の生徒はとてもフレンドリーで、親切で、面白くて、一生懸命で、私はすぐに彼らを好きになりました。彼らは自分自身の考えを持ち、自分がどうしたいのかをしっかり考えているとともに常に周りの人のことを考えています。尊敬しなければならないところだらけです。彼らに出会って、彼らの生活を見るごとに、イスラム教のことをもっと知りたいと思うようになりました。人に出会うことで、知りたいことが増えることを学びました。

たくさんの友人と出会い、多くの時間を一緒に過ごすことができました。家に招いてもらってパーティーをしたり、週末には一緒に観光に出かけたり、お寿司を食べたり、中東の料理を食べたり、彼らに出会って素晴らしい時間を過ごせたことが、この研修で一番嬉しかったことです。あんな風に集まって笑いあえることはきっともうないと考えると、すごく寂しくなります。ただ、こんなにも忘れたくないと思う感情を抱くことができたことは、本当に幸せなことです。英語をしっかり使いこなせるようになって、いつかまたどこかで会って、その時はもっとたくさん感謝の気持ちを直接伝えたいです。

（誌面の都合で一部省略）

3週間を振り返って、すべての場面において、もっと英語を話せたら、もっともっと彼らのことを知ることができたのに、という思いが、今もずっと強く残っています。伝えたいことが伝わらず、知りたいことがあってもうまく聞けず、悔しい思いをたくさんしました。学校の試験のためではなく、「この人のことをもっと知りたい」「自分のことをもっと知ってほしい」という、誰かとコミュニケーションをとるために英語を勉強したいと、初めて思いました。この3週間は、間違いなく私の未来を変えてくれたと思います。

短期インターンシップ研修を終えて

学生支援課　原田 翔平

私は福岡教育大学の職員として、今回のインターンシップ研修に参加させていただきました。私としては、人生初の海外経験がマレーシアで、しかもインターンシップになることなんてまったく予想していませんでしたが、結果的にこのマレーシアでの経験は一生忘れられないものになりました。

私が掲げたマレーシアでの目標は「何でもやってみる」です。これは空港に着いた時点で始まりました。マレーシアで他の職員との連絡をとるためには、Wi−Fiスポットだけを当てには出来ず、現地で使える携帯電話を準備し、SIMカードを購入しました。高校を卒業して7年間英語とは無縁の生活をしているので不安がありましたが、難なく購入できました。他には現地の人々が勧める食べ物は全て食べ、なるべく様々な人とコミュニケーションをとるようにしました。マレーシアの若者が使っているタクシー予約アプリケーションもスマートフォンにダウンロードして使いました。何でもやってみると目にするもの、口に入れる物、聞くことのすべてが初めてでとても刺激的でした。

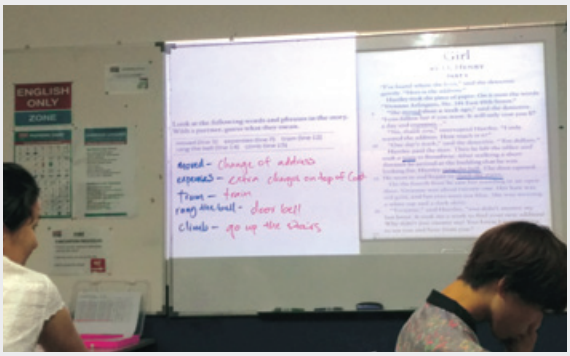
マレーシアで生活した2週間はとても有意義で、簡単にはまとめることが難しいのですが、私はマレーシアの経済力や個々人のスキルにとても刺激を受けました。マレーシアは現在景気が波に乗り、高層ビルが多々建設中で、町中には高級車が溢れ、人々は活気に満ちているような印象を受けました。個々人のスキルにしても、出会った人々はマレー語以外に英語や中国語を話すことができ、その語学力を利用して海外の大学に留学し、さらにスキルに磨きをかけていました。ビジネスにしても、海外とのやりとりが当然のように行われています。

マレーシアは多民族国家であり、様々な人種がいます。文化も様々でショッピングモールに行けば、世界中の料理店が出店しています。電車の駅の表示もさまざまな言語で標記されており、とても便利です。電車での乗り方がわからない人がいれば教えてくれます。

マレーシアの人々は私たちのことを「外国人」として見ていませんでした。なぜなら道行く人がマレーシア人か否かなど、誰も区別ができないからです。私はマレー語や中国語、韓国語で話しかけられました。駅で電車の切符の買い方を尋ねられたこともありました。

マレーシアに行くと、様々な人種に出会え、国際的な感覚を体験することができます。またその中で英語が意思疎通の便利なツールであることを実感できます。

グローバル社会の中、私たちは世界中の人と競争し、また協力していかなくてはなりません。そのようなグローバル人材を育てるためには、まずはじめに教職員や教育者がグローバル人材にならなくてはいけません。海外に一度目を向け、海外の良いところを吸収し、海外から日本を見つめ直し、日本の良いところを伸ばしていく。そのような考え方が今後重要になってくるのだと、この研修を通して実感しました。


授業風景

現地企業でスタッフに作品を見てもらう
インターンシップ研修生（右端後ろ姿）

営業先でプレゼンする
邦人企業インターンシップ研修生

インターンシップ研修先の
デザイン事務所

“マレーシアで最も美しい”と言われる
ブルーモスクの前でELCのクラスメイトと

マラッカ観光にて

ELCのクラスメイトと
シティギャラリー横モニュメント前にて

語学研修・インターンシップ研修報告会を開催

語学研修とインターンシップ研修への参加者による研修報告会が10月27日（火）に開催されました。

司会進行を含む報告会の内容はすべて参加学生たちによって企画され、研修先ごとのグループに分かれて報告がありました。各グループの学生たちが、それぞれの研修の内容や、研修先で独自に調査･考察したことを写真やグラフなどを使用してスクリーン上で分かりやすく発表しました。

司会進行をする学生

発表の様子

ポスター発表

異なる母語や文化を持つ相手を理解し、自分の考えを述べ、共に何かを成し遂げる、今後もこのような多様性から学ぶ姿勢を持ち続け、その楽しさを次世代の子供たちに伝えていってもらいたいと思います。

次回は、貴方のチャレンジをお待ちしています。

福教大NEWS 1

オープンキャンパス2015を開催しました

福岡教育大学では、7月25日（土）にオープンキャンパスを開催しました。

今年も天候に恵まれ、朝早くからたくさんの高校生や保護者の方など、2750人もの来場者をお迎えしました。

大学説明会の様子

オープンキャンパスでは、大学説明会のほかに各専攻等の紹介や体験授業、在学生による個別相談など、多彩なイベントが学内各所で開催されました。

大学説明会では、寺尾学長より「高校生へのメッセージ」と題した話もあり、参加された高校生や保護者の方々が、熱心に耳を傾けている姿が見受けられました。

体験授業では、高校生や保護者の皆さんに大学での学びを体験していただきました。

また、在学生による相談コーナーでは、談笑を交えつつ和やかな雰囲気のなか、高校生からの質問に在学生が答えました。

体験授業

体験授業

体験授業

在学生による相談コーナー

中庭でのサークル活動紹介の様子

当日は、サークル活動の練習も公開しました。中庭等でダンスや演奏を披露するサークルもあり、大いに盛り上がりました。

オープンキャンパスのアンケートにご協力いただいた方に、本学オリジナルグッズを配布しました。これを機に本学により親しみを抱いていただけましたら幸いです。

みなさまからお寄せいただいた意見を踏まえ、来年度以降も、さらに進化した福教大オープンキャンパスにできるよう、教職員一同尽力いたします。

本学オリジナルグッズ

福教大NEWS 2

福岡教育大学 未来奨学金授与式を行いました

7月28日(火)に、平成27年度福岡教育大学未来奨学金授与式を実施しました。

「福岡教育大学未来奨学金」は、学生の学業及び海外留学を奨励することを目的として、平成24年度に創設された本学独自の給付型奨学金で、「学業成績優秀者奨学金」と「国際交流協定校派遣支援奨学金」の2つがあり、今年度で4年目の授与となります。

今年度は20名の学生が奨学金を授与されました。寺尾学長から「奨学生の皆さんには、受け取った奨学金を活用し、学校教育現場、あるいは地域社会等で指導的役割を果たし、活躍する人物となることを期待しています。」と激励の言葉が贈られました。

これを受け、学業成績優秀者奨学生を代表して、宮尾祥平さん(初等教育教員養成課程3年)から、感謝の言葉とともに「いただいた奨学金は、小学校教員になるという夢の実現のため、有意義に活用したいと思います。」と決意が述べられました。

なお、「国際交流協定校派遣支援奨学金」については、受給予定の学生がいましたが、「平成27年度独立行政法人日本学生支援機構海外留学支援制度(短期派遣)奨学金」及び「馬場財団国際理解教育人材養成奨学金」に採用となったため、今年度は「学業成績優秀者奨学金」のみの授与となりました。

学業成績優秀者奨学生と寺尾学長

福教大NEWS 3

教員養成の質向上に関する諮問会議を開催しました

7月29日(水)に、平成27年度第1回教員養成の質向上に関する諮問会議を開催しました。(委員総数29名)

会議の開催に当たり、学長から議長へ、「本学教職大学院による教員の資質・能力の高度化に向けた取組方策について」と題した諮問文が手渡され、担当理事から諮問内容の説明後、教職大学院の充実・拡充等に関して委員から意見や質問が相次ぎ、活発な意見交換が行われました。

今後この諮問に対する検討を行うに当たっては、本諮問会議に専門委員会を置き、専門委員会で具体的な検討を行い、平成27年12月を目処に答申を取りまとめることとしています。

諮問会議は、教育委員会の幹部職員や公立の連携協力校の長等を構成員とし、教員養成に関する様々な社会の要請を踏まえたカリキュラムの検証、養成する人材像、現職教員の再教育の在り方などについて審議いただくため、平成26年度に設置したものです。

諮問会議から提出された答申を踏まえ、実践型教員養成機能への質的転換等、教員養成に対する社会の要請を受けとめた改革を加速することとしています。

諮問文を渡す寺尾学長

諮問会議の様子

福教大NEWS 4

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会布村幸彦副事務総長による講演会を開催しました

講演の様子

7月29日(水)に、本学アカデミックホールにて、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会の布村幸彦副事務総長による講演会を開催しました。

本講演会は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動の一環として開催したもので、学生や教職員約130名が参加しました。

講演は、「スポーツには世界と未来を変える力がある」と題して行われ、近代オリンピック・パラリンピックの起源やスポーツ基本法をはじめ、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会の概要について、動画やスライドを用いて分かりやすく解説していただきました。また、大会本番に"競技を見るだけ"ではなく、聖火リレー、ボランティア、文化教育イベントなど、大会前に実施する様々なプログラムを通して"より多くの人と共に大会をつくっていこう"という考え方である"エンゲージメント"についてもお話いただき、大会を成功させるために、被災地や全国の自治体、大学等と連携を行うことの意義について深い理解を得ることができました。

講演会の最後に、フライングディスク競技(アルティメット)世界U−23選手権大会で優勝した赤澤加奈さん(初等教育教員養成課程3年)の紹介があり、赤澤さんから「多くの方々のおかげで金メダルを獲得することができました。フライングディスク競技は2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会の正式種目となりませんでしたが、1人のアスリートとして大会に出場される選手の方々を精一杯応援し、大会成功に少しでも貢献できればと考えています。」との挨拶がありました。

本学は今後も、東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、オリンピック教育の推進、グローバル人材育成、パラリンピックの理解促進及びイベントなどの活動を積極的に推進してまいります。

福教大NEWS 5

平成27年度福岡教育大学全学FD・SDセミナーを開催しました

田中岳准教授による講演の様子

パネルディスカッションの様子

7月30日(木)に、「平成27年度福岡教育大学全学FD・SDセミナー」を開催しました。

このセミナーは、「学生の主体的な学びを育む　ーアクティブ・ラーニング、単位の実質化、事前事後学習等ー」をテーマとして、他大学からの参加も含め130名近い教職員が参加しました。

九州大学基幹教育院の田中岳准教授を講師として招き、「教室の内と外を結びつける ー九州大学基幹教育カリキュラムの実践ー」と題して、基幹教育院の教育目的・目標、授業デザイン等について実際のシラバスの紹介も含めた説明がありました。

講演後のパネルディスカッションでは、日本赤十字九州国際看護大学の姫野稔子教授、東海大学福岡短期大学の宮川幹平准教授及び本学の唐澤重考教授をパネリストとして、各大学の現状や取組みについての発表がありました。

その中でアクティブ・ラーニングについての率直な疑問や事例紹介があり、コメンテーターの田中准教授が課題を整理しつつ、活発な議論や情報交換が行われました。

最後に会場からも実際的な取組みへの質問が出て、実りあるセミナーとなりました。

福教大NEWS 6

第10回宗像地区教育関係者合同研修会を開催しました

8月6日(木)に、本学アカデミックホールにて「第10回宗像地区教育関係者合同研修会」を開催しました。「福岡教育大学と宗像地区の学校・地域との連携について」を全体テーマとし、猛暑の中、宗像市・福津市教育委員会および学校関係者、本学関係者を合わせて約210名の参加がありました。

開会行事では、寺尾学長から「今年で第10回の節目の回を迎えた。本学では昨年10月より学内予算により『福岡教育大学COC事業』を実施しているが、今後も地域及び知の創生の拠点として、ここ宗像地区との連携事業の経験を出発点としていきたい。また、より緊密な連携事業を積み重ねていくためにも、常に皆様方の意見に耳を傾け、改善を模索していきたい。」との挨拶がありました。

第一部では、「大学が果たす役割～地域連携を通して～」と題して、文部科学省大臣官房審議官(高等教育局担当)　義本博司氏による講演が行われました。義務教育及び高等教育の双方に精通された義本氏から、「教員は、教える専門家から学びの専門家への転換が求められている。そのためには、大学生の時期にいかに学校現場との接点を多く持つかが重要であり、義務教育と大学との連携あるいは協働が、これからの教員養成大学の軸になってくる。そういう意味では、福教大と宗像地区との連携のありようは、全国的にも先駆的な取組みと言える。いっそうの高度化をめざし、PDCAサイクルを確立し、積極的な情報発信をお願いしたい。」との発言がありました。

第二部では、これからの連携のあり方について、連携する上で困っていること、これから実施してみたい連携事業、またその上での課題の3点について、小グループでの討議を行いました。学生ボランティアに関する諸課題や希望、その他大学教員との連携など、活発な意見が交わされました。

寺尾学長による開会挨拶

義本審議官による講演

会場の様子

福教大NEWS 7

「障害学生支援センター」が8月1日より開設ました

8月1日より、障害のある学生への修学及び学生生活の支援を行っている「障害学生支援室」を更なる支援の充実を図るため、発展・拡充し、「障害学生支援センター」として発足しました。

障害学生支援センターは、障害のある学生、本学の入学を希望する方及び本学を利用する方が、本学での修学、学生生活、大学行事等において適切な支援を受けることができるよう、学内外の関係部局等と連携しながら全学的な支援体制を強化し、本学における障害のある学生等への支援の充実を図ることを目指しています。

平田障害学生支援センター長(左)と寺尾学長(右)

主な支援内容

○障害のある学生が履修する授業内での情報保障（※パソコンテイカー等派遣）
○授業で使用する視聴覚教材への字幕挿入
○行事や式典での情報保障（※パソコンテイカー派遣）
○視覚障害学生が履修する授業に関する拡大資料、テキストデータ作成
○支援機器の整備、貸出
○学内バリアフリー状況確認
○教育実習時における支援
○就職支援　など

※パソコンテイカーとは、パソコンを用いて授業中の音声情報を入力し、伝達するサポートスタッフのことです。(本学では、主に障害学生支援センターの支援学生が担っています。)

授業におけるパソコンテイクの様子

福教大NEWS 8

新たな学習指導要領、学校教育を担う教員の育成に向けたシンポジウムを開催

現在、国では次期学習指導要領の検討が進められており、今後の学校教育は、グローバル社会において必要となる資質・能力の育成、それらを踏まえた各教科等での指導と評価、子供達の主体的・協働的な学びの促進といった大きな変化が想定されます。

このため、教員養成・研修で教員の資質・能力をはぐくんでいくためには、これまでとは異なった視点や知識・技能を身に付け、向上させていくことが必要と考えられます。

このようなことから、教員養成の広域拠点大学である本学では、各地域の大学、学校、教員研修機関等からの参加者を得て、8月28日（金）に今後の学校教育を見据えての教員の資質・能力の育成、高度化に向けた取組みの在り方を考え、今後の実践、関係取組みの充実につなげていく契機となるよう、「子供の新たな学びの指導を担う教員の育成に向けたシンポジウム」を開催しました。

当日は、文部科学省初等中等教育局の小野賢志専門官より、先般取りまとめられたばかりの次期学習指導要領の論点整理を中心に基調講演をいただくとともに、本学の寺尾学長がコーディネーターとなり、小野専門官を含めた6名の行政・研修機関、大学、学校の関係者によるパネルディスカッション、本学の教員、学校関係者による研究成果・実践発表が行われ、アクティブ・ラーニングが目指すもの、今後の学校教育の方向、各実践で必要な視点や取組み等の理解を深めることができました。

今後も本学では、各地域の行政・研修機関、大学、学校と連携しながら、学校教育の質の向上、教員養成・研修の充実に貢献してまいります。

【当日のプログラム内容】

●基調講演

「次期学習指導要領を見据えた新たな学校教育の展望について」

文部科学省初等中等教育局教育課程課専門官 小野 賢志

●パネルディスカッション

「今後の子供の学びを指導できる教員をどのように育んでいくか」

パネリスト:小野 賢志（文部科学省初等中等教育局教育課程課専門官）

髙口 努（独立行政法人教員研修センター理事）

室之園 晃徳（鹿児島県鹿児島市立田上小学校校長）

村上 伸一（福岡県粕屋町立粕屋東中学校校長）

上地 幸市（沖縄大学人文学部教授、教職支援センター長）

芋生 修一（福岡県教育センター教育経営部部長）

コーディネーター:寺尾 愼一（福岡教育大学長）

●研究成果、実践取組発表

飯田 慎司（福岡教育大学「資質・能力の効果的な育成に向けた教科教育の研究プロジェクト」代表）

室之園 晃徳（鹿児島県鹿児島市立田上小学校校長）

生田 淳一（福岡教育大学准教授）

中原 真吾（福岡教育大学附属福岡中学校教諭）

小野賢志専門官による基調講演

寺尾学長による挨拶

パネルディスカッション

研究成果、実践取組発表

福教大NEWS 9

福岡教育大学ESDセミナーを開催しました

田村学視学官による基調講演

平成27年9月12日(土)に、「ESDは、教育課程のどこで展開するのか、できるのか?」をテーマとし、本学アカデミックホールにて「福岡教育大学ESDセミナー」を開催しました。九州・沖縄を中心に全国各地からお申し込みいただき、本学関係者を合わせて約153名の参加がありました。

現在の学習指導要領でも、「持続可能な開発のための教育」(ESD:Education for Sastainable Development)の観点や関係事項は取り入れられており、次期の学習指導要領でも重要な位置づけがなされるものと予想される一方で、教育課程、各教科等の中でどのようにESDを展開していくかは、学校現場にとって大きな課題ともなっています。

本学では、これまで社会科教育講座石丸哲史教授がESDに先導的に取り組んできたことから、各地域の学校現場でのESDの展開に貢献すべく、文部科学省及び大牟田市教育委員会との共催により、文部科学省田村学視学官や各地域の実践者をお招きして本セミナーを開催し、総合的な学習などの教科等でESDをどのように無理なく実践していくことができるかを提案、議論いただきました。

田村学視学官による基調講演では、今後の教育課程を見据えた場合、総合的な学習の目標がESDの目指す方向性とシンクロしていること、ESDのメインフィールドが総合的な学習になりうることなど、総合的な学習におけるESDの展開について多くの示唆をいただきました。

つづいて、ラウンドテーブルでは、江東区立八名川小学校校長の手島利夫先生より、実践発表とその成果についてご紹介いただき、ユネスコアジア文化センタープログラムスペシャリストの松尾奈緒子先生からは、国際協働学習やHOPEアプローチのご紹介をいただきました。これらについて田村先生からご意見をいただき、参加者からの質問もふまえ、ESDの評価についても触れていただきました。

最後に、日本生活科・総合的学習教育学会会長である本学寺尾慎一学長が、総合的な学習においてESDをどう展開していくかを総括し、ESDにも精通する教員養成の在り方に言及しました。

今後も本学では、各地域の関係者と連携しながら、学校教育における最先端の情報や実践事例の提供に努めてまいります。

※ESDとは

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で、「持続可能な開発のための教育」と訳されています。

今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。

つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

福教大NEWS 10

第2回「ハンセン病問題を語り継ぐもの」シンポジウム 家族が語る 未来への絆～マレーシアと日本より～を開催しました

喜多理事長による挨拶

10月19日(月)に海外からのお客様をお招きして、シンポジウムを開催しました。

ハンセン病について、日本では1996年のらい予防法の廃止によるまで、患者は強制的に療養所に隔離され、療養所の入所者は子どもを持つことが許されなかったという経緯がありますが、マレーシアでは、少し異なり、入所者は子どもを持つことはできましたが、育てることができず、生後6ヶ月まで所内の乳児院に預けられた後は、養護施設へ送られたり、養子に出されていたという歴史があります。

今回のシンポジウムは、両親が入所者であり、ニュージーランドとマレーシアという別々の場所で育てられ、数十年の時を経て、初めて会った二人の姉妹が自分達のルーツをたどる過程で経験したことを中心として構成されました。

最初に、世界のハンセン病問題解決に取り組んでいる笹川記念保健協力財団の喜多理事長より、ハンセン病や、それを取り巻く問題の変遷などについて説明があり、その後、ハンセン病回復者とその家族の再会を支援しているエニー・タンさんから、マレーシアにおけるハンセン病の歴史、対策、入所者の家族との再会を支援する活動等が語られました。妹であるエスター・ハーヴェイさん、姉であるヌルル・エン・ヤップ・ビンディ・アブドゥラさんからは、姉妹が出会うまでの心の葛藤等が語られました。

林先生からは、ご自身のお父様がハンセン病にかかられ、強制的に隔離された当時の状況、お父様の悲しい最後の様子等が語られました。

今回は、150名の学生が参加しました。ヌルルさん、エスターさん、林先生の思い、これからの子供たちの教育を担う教員となるべき本学学生に、ハンセン病、人権問題についてなにかを考えてほしいという気持ちが、十分に伝わったのではないかと思います。

会場の様子

授業紹介

中等理科教育演習Ⅱ（生物領域）

理科教育講座 准教授　甲斐　初美

教員プロフィール
甲斐　初美
（かい　はつみ）
東京学芸大学大学院博士課程修了後の2010年4月から本学に赴任。専門は、理科教育学で、特に生物領域を中心とした自然認識論、教授学習論、動機づけ理論の研究を行っている。

教材研究をしている様子（シダ植物の学習）

生物領域における教材研究の奥深さを学ぶ

中等理科教育演習Ⅰ・Ⅱでは、中学校の教員免許状を取得する学生を対象として、生徒の観察・実験を指導していく際に必要となる実践的能力を高めるための演習を行っています。中等段階の理科の学習内容は、物理・化学・生物・地学の4領域で構成されているため、2年後期の中等理科教育演習Ⅰでは化学・地学領域について、3年前期の中等理科教育演習Ⅱでは物理・生物領域についての教材研究を行っていきます。私の担当している中等理科教育演習Ⅱの生物領域(7回分)では、他領域とは異なり、生命を対象としているため、生命倫理や環境倫理の視点を踏まえながら、生物試料を取り扱っていく必要があります。また、生物の個体差や季節性、天候等を勘案しながら、理論値通りにならない観察・実験データを解釈したり、観察・実験そのものを構想したりしなければならないという教材研究の難しさが潜んでいます。

実習に備えて教材研究の成果を共有化する

中学校理科で取り上げられる光合成や体細胞分裂、花粉管の伸長等の10テーマのうち1つをそれぞれ3、4人構成の10グループで担当し、観察・実験の企画立案、予備実験の実施、教材開発等の演習を行います。多くの学生たちは、授業時間外もこれらの教材研究に勤しんでいます。特に、現在の教育課程では、自分たちが学習していない内容が取り扱われているため、教材研究には時間がかかります。さらに、授業の後半では、実演式のディスカッションやプレゼンテーション発表により、教材研究の成果を共有化しています。

これらの演習を通して、教科内容の系統性や単元間の関連性について考察したり、取り扱う教材の特性や観察・実験における指導上の留意点等について整理したり、具体的に授業を構想したりすることで、3年後期に実施される教育実習準備の見通しを持つことができるように配慮しています。

教材研究をしている様子（体細胞分裂の学習）

教材研究成果を実演しディスカッションしている様子（軟体動物の学習）

総合学習教材開発B

生活総合教育講座 教授　冨安　浩樹

教員プロフィール
冨安　浩樹
（とみやす　ひろき）
広島大学大学院教育学研究科博士課程後期教育心理学専攻修了（博士（心理学））
研究はセルフ・エフィカシーの観点からの教育実践等について。授業は教職実践演習等を担当。1999年本学着任。

総合的な学習の時間と探究的学習

本授業では、教材開発の観点から総合的な学習の時間の学びの意義について理解を深めています。総合的な学習の時間で学ぶ意義の重要な観点のひとつとして探究的な学習があげられます。探究的な学習は、自ら課題の設定し、課題解決のために情報の収集をし、収集した情報を整理・分析し、考えたことや意見をまとめ・表現するといったプロセスで進められます。この探究的な学習によって学び方や考え方を身に付けることもできます。そこで、受講生の皆さんにも、このプロセスを大切にしながら、実際に教材開発をおこなってもらっています。

総合的な学習の時間とアクティブ・ラーニング

現在、アクティブ・ラーニングの重要性が強く提唱されていることはよく知られています。総合的な学習の時間では、主体的学び、協働的学び、課題を解決する学びを大切にしますので、既にアクティブ・ラーニングが導入されているともいえるでしょう。本授業においては、さらに、アクティブ・ラーニングの観点から、総合的な学習の時間の学びを充実できるような授業にしたいと考えています。

総合的な学習の時間と自己の生き方を考えること

総合的な学習の時間においては自己の生き方を考えることができるようにすることを目指しています。総合的な学習の時間では、たとえば、現代に生きる人が考えなければならない教育的価値のある課題を設定することが望まれています。そのような課題を探究し自己の生き方を考えることできるようにすることが大切にされています。本授業においても、受講生の皆さんが現代に生きる人として、自己の生き方を考えることを深めることができるように工夫をしたいと考えています。

社会科教育講座　小森 雅子 研究室

現代社会の問題に向き合う場

法律学研究室では、国内社会・国際社会における諸問題に対し、法的な切り口から研究を進めています。演習では、研究論文または判例を読みながら基礎を身につけ、その後は、各自の報告を軸に進めています。テーマは多岐にわたりますが、国内法では、憲法（9条など）、刑法（刑罰のあり方など）、少年法（犯罪被害者の権利保護など）に関するテーマが、国際法では、人権（特に少数者の権利）、紛争解決、軍縮、自衛権というテーマが、多く占めます。最近では、日本の抱える領土問題、EUの経済問題などのテーマが続いています。いずれにおいても、「法とは何か」、「なぜ法が必要か」という根本的な問いを持ち、各テーマにおいては「その法の目的はどこにあるのか」、「その法改正は、何を目指しているのか」、「その解釈の根拠はどこに求められるのか」という具体的な問いも、併せて持つよう指導しています。法律も条約も、最初から完璧なものでなく、それぞれの社会で生きる人間が、受け継ぎ、向き合い続け、育てていくものです。2年間の演習のなかで、このことを念頭におきつつ、論理的思考能力を身につけてほしいと願っています。

自分自身と向き合う場

本研究室は、私が担当し始めて、今年度で10年目を迎えました。これまでの9年間で巣立った卒業生は、60人を超えるようになりました。卒業生たちの就いた職業は、教員（小学校・中学校等）はもちろん、法務教官、県・市職員、警察官、報道記者（テレビ局）、企業の営業職など、多岐にわたります。教員以外の職に就いたゼミ生たちも、本学での学び・実習の経験等を、それぞれの仕事で活かし、活躍しています。

年に一度の卒論発表会では、彼らが、後輩たちに、貴重な助言を与えてくれます。社会のそれぞれの場で、自分を活かしていくことの大切さと難しさ。働き続けることの大変さ。彼らでないと伝えられないメッセージを、伝えてくれます。彼ら一人一人が、本学にとって誇るべき人材であり、私自身にとっては大切な宝物です。

ゼミは、大学生活のほんの一部です。その限られた期間のなかで、それまでの彼らの人生と、現在、そして未来の日々が、やがてはつながっていくというイメージを、持って欲しいと思っています。彼ら自身が輝ける場を求めて、彼らの人生の「物語」を、紡ぎ続けてもらうために。

2015年2月の卒論発表会の様子

卒業生と、当時3年生·4年生と、ゼミ所属の決まっていた当時2年生とともに

2015年度現在、3年生10名、4年生7名が研究室に所属しています

球ちゃん(アルティメットサークル) Kyu-Chan

私たちアルティメットサークルの「球ちゃん」は、男女合わせて約30名で活動しています。そもそも「アルティメット」とは、バスケットボールとアメリカンフットボールを合わせた様な競技で、フライングディスク(いわゆるフリスビー)を用います。7人ずつ敵と味方に分かれて一枚のディスクをパスによって運び、相手のエンドゾーン内でパスをキャッチすると得点になるというシステムの近代スポーツです。聞き慣れない名前のスポーツだと感じる方も多いと思いますが、当初は私たちも同様で、サークル内のほぼ全員が大学から競技を始めました。中には、高校までは文化部に所属していた人もたくさんいます。

今年の9月に行われた学生大会九州地区では男子部門は4位、女子部門では3位を獲得しました。また、今年の7月に行われた「WFDF2015世界U−23アルティメット選手権大会」では、私たちの中から1名がウィメン部門の日本代表選手に選出され、見事に世界1位という快挙を成し遂げました。

私たちアルティメットサークルでは、競技に真剣に取り組むとともに、キャンプやBBQなどの楽しい活動をたくさんしています。

アルティメットに少しでも興味を持った人はもちろん、大学から新しいことを始めたい人、体を動かしたい人など、どんな方でも大歓迎です。ぜひ一度、私たちの活動を覗いてみてください。

中等教育教員養成課程理科専攻 2年　安井 駿

落語研究会 Rakugo Kenkyu-kai

私たち落語研究会は、現在男子10名、女子6名の計16名でのんびりと活動しています。少ない人数ですが、だからこそ先輩・後輩の分け隔てなく、和気藹々と楽しくやっています。

主に火曜日と金曜日に部会を開き、“寄席”という発表の場に向けて落語の練習を行ったりしています。落語のDVDを鑑賞したり、部員同士の絆を深めるためにレクリエーションを行ったりしています。寄席は年4回開催していますが、最近では大学内の食堂「フィオーレ」をお借りして小さな寄席を開くこともあります。中でも、大学祭で行う「赤馬寄席」は来客数も一番多く、とても盛り上がります。

他にも、ボランティア活動の一環として様々な場所へ出向いて落語を披露したり、「全日本学生落語選手権・策伝大賞」に出場したりと幅広く活動をしています。落語の依頼は、ホームページ(http://x27.peps.jp/fukkyoochiken)で随時受け付けています。日々の活動の様子は、公式twitter(@fue_ochiken)でも確認することができます。

同じ噺(はなし)でも、演者が違うだけでガラリと印象を変えてしまうのが落語の魅力の一つ。試行錯誤を繰り返しながら作り上げる世界でたった一つの物語です。どうぞ、気が向いた時にでもゆるりと寄席に足を運んでみてください。

初等教育教員養成課程美術選修 2年　桑原 まりあ

社会連携

研究連携

学校、教育委員会等との連携

福岡教育大学では、学校、教育委員会及びその他の機関・団体との連携事業や共同研究を推進し、その成果を積極的に社会に還元します。

連載第12回

平成26-27年度文部科学省特別経費（プロジェクト分【継続事業】）
高度な教職実践力を育むデジタル基盤教材開発事業

「匠のわざ」の伝承

本学教職実践講座（教職大学院）では、文部科学省の助成により、本学附属小中学校の教職員と連携して平成26-27年度特別経費（プロジェクト分【継続事業】）「高度な教職実践力を育むデジタル基盤教材開発事業ー「匠のわざ」の伝承ー」に取り組んでいます。

本研究の目的・目標

教員養成系大学の学生が課程修了までに確実な授業技術を習得できるように、必要な知識や技能を精選したデジタル教材を開発し、大学カリキュラムと連動させ、eラーニングとして配信するシステムを確立することです。

授業技術とは

日常の教材研究や指導方法の開発を含め、指導の充実・改善への取組をすることとそのための専門的力量のことです。教員は、この授業技術を駆使して、児童・生徒が「わかった!できた!」を実感できる授業を日々実践改善しています。

研究の背景

昨今の学校現場では、大量の教員が退職期を迎えています。それに伴い、入れ替わりで赴任される若手教員数が増加し続けており、経験豊かで指導力の高い先輩教員から授業技術を受け継ぐ機会が減少していきます。この状況は少なくともこれから10年は続くと予測されており、若手教員には、赴任したその時から、確実な授業技術を求められます。この現状を踏まえて、教職大学院は本事業を提案し、推進しています。

プロジェクト推進チームによる打合せの様子

プロジェクト推進チーム

プロジェクト推進チーム（教職大学院）	
平成26年度	重松 宏明（現・福岡県教育センター教育指導部参事） 納富 恵子、小泉 令三、香川 治美
平成27年度	納富 恵子、小泉 令三、森 保之、香川 治美

教科・領域のコンテンツ作成チーム

社会科（小学4年）コンテンツ作成チーム		
授業担当	附属学校	藤岡 太郎（授業者）、芋生 修一、森 将和
協議・解説担当	大学教員	長谷川 弘明、重松 宏明、豊嶌 啓司、小田 泰司

算数科（小学4年）コンテンツ作成チーム		
授業担当	附属学校	古賀 弘行（授業者）、髙橋 泰朗
協議・解説担当	大学教員	髙松 勝也、重松 宏明、矢野 俊一

道徳（中学2年）コンテンツ作成チーム		
授業担当	附属学校	笹渕 恵（授業者）、永溝 弘幸、田中 里子
協議・解説担当	大学教員	池田 隆、山見 育志、小泉 令三

理科（中学1年）コンテンツ作成チーム		
授業担当	附属学校	堀 浩二（授業者）、吉本 眞也
協議・解説担当	大学教員	平石 信俊、矢野 俊一

※上記4教科・領域のコンテンツは平成26年度に作成しました。
平成27年度は「特別活動」「国語科」「体育科」「英語科」のコンテンツ作成チームを結成しています。

開発教材の特徴

モデルとなる教員の45分間（または50分間）の示範授業映像をベースとして、授業づくりのPDCA、計画段階の指導案・板書計画・発問計画、授業者の自評、児童理解や教育方法学の専門家や卓越した授業者の解説が盛り込まれています。

開発教材の用途例

・教員をめざす学部生・大学院生の予習・復習
・講義・学会・研究会等「授業技術」の教育研究

開発教材のポイント

・授業映像の教員は本学附属学校が誇るベテラン教員です。
・授業45分（または50分）の間の先生と児童生徒とのやりとりが、鮮明な映像と音声で、4つの視点（4画面）から可視化されています。
・授業者や研究者など複数のエキスパートによる理論かつ実践的な解説が、動画と同時に表示されます。
・授業技術の解説は、解説字幕だけでなく、テキストや動画、音声でも閲覧できます。
・eラーニングとして開発教材を配信できます。

教材開発の様子

附属久留米中学校の笹渕恵先生による中学2年生対象の道徳の授業の様子です
（平成26年11月27日・附属久留米中学校にて）

附属福岡中学校の堀浩二先生による中学1年生対象の理科の授業の様子です
（平成26年12月9日、附属福岡中学校にて）

附属福岡小学校の藤岡太郎先生による小学4年生対象の社会科の授業の様子です
（平成26年12月12日、附属福岡小学校にて）

附属久留米小学校の古賀弘行先生による小学4年生対象の算数科の授業の様子です
（平成27年1月23日、附属久留米小学校にて）

教育工学を専門とする講師を招聘してセミナーを開催しました。（写真左:平成27年2月27日現・横浜国立大学講師・脇本健弘先生、写真右:平成27年3月3日九州大学准教授山田政寛先生）

開発教材を用いて教職大学院の院生を対象とした学びの試行検証を行いました
（平成27年2月27日教職大学院大講義室にて）

国立情報研究所新井紀子研究室に招かれて本事業を紹介しました（平成27年8月25日NetCommons ユーザカンファレンス2015）

研究集会（写真・大宮ソニックシティ）や日本教育工学会（平成27年9月21日 電気通信大学）で発表しています
（平成27年10月10日 日本教育大学協会研究集会）

プロジェクトWEBサイトのURI
https://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~Takumiproject1

プロジェクトの詳細については、
上記WEBサイトでもご紹介しております。ぜひご覧ください!

【問い合わせ先】
福岡教育大学　教職実践講座（教職大学院）
「匠のわざ」の伝承プロジェクト事務局
TEL▸0940-72-6028　FAX▸0940-35-1746
E-mail▸kagawa@fukuoka-edu.ac.jp

福教大卒 第11回

OB★OG

直方市立福地小学校
教諭 西村 仁志（にしむら ひとし）さん
平成25年3月
初等教育教員養成課程社会科選修卒業

運動会でつくった旗

学級目標

子どもたちが円陣を組む様子

大学を卒業し、社会人となり学校に赴任するまで不安や心配が多々ありました。でも、若さでぶつかっていこうと言う想いをもって、子どもたちの前に立ちました。学級経営の基盤となるかどうかは、わかりませんが、子どもたちが社会に出たとき、「生きる力」を持ってほしいと、常々考えています。

1年目は4年生、2年目は5年生、3年目の今年は6年生です。

単学級であるために、ずっと同じ子どもたちを受け持っています。

「学校が楽しい。」

「みんなと遊ぶのが楽しい。」

「この学級が好きだ。」

「勉強がよくわかる。」

と思えるようなクラスにしたいと、日々努力しています。

3年間共に過ごしている今の学級の子どもたちは、教科学習に意欲的に取り組むことができています。わからない人が自ら進んでたずねたり、全体の場で質問したりして学習内容をみんなで深めることができています。また、昼休みや放課後になると、係の子どもたちが様々なレクリエーションを催し、学級の皆や、学校全体を巻き込んで活動を行っています。（鉄棒ぶら下がり大会･じゃんけん大会･ドッジボールなどなど）

特別活動

このように意欲的で、主体的に楽しめたり、学習したりするようになってきたのは、特別活動に力を入れるようになってからです。

特別活動とは、学級をよりよくするための話合い活動や、実践活動を行う時間だけでなく、係活動、当番活動、朝の会、帰りの会、給食の時間、委員会活動、運動会などの学校行事、クラブ活動など、学校生活の大部分を占めている活動のことです。

私は特別活動について大学生の時から熱心に学習したり、研究していたりしたわけではありません。しかし、福岡教育大学の先輩や、教授の先生方に特別活動のことについて教えていただく機会があり、それを実践しています。。また、学校は違いますが、近くの学校に特別活動のことについて全国で活躍されている素晴らしい先生にも出会うことができました。先輩先生方の素晴らしい実践を目の当たりにして、いつも私は「自分にできていない部分は何だろう。知りたい。聞いてみよう。」と探求しています。

先生になる教育大生のみなさんへ

卒業したらすぐに「先生」と言う立場になり、教えられる学生から、教える立場へと激変します。子どもと、その後ろにいる保護者との関わりの始まりです。「先生」と言う職業ですが、決して気負わず「子どもたちとともに歩もう」と言う想いを持ってください。

先生になったら、わからないことばかりだと思います。

わからないことは、まずは同学年、学校内の先生方にどんどん聞き、教えていただきましょう。そして、社会人としての礼儀である、お礼の言葉を添えることを忘れないでください。この姿を子どもたちが見ていると思います。

遠賀町立遠賀中学校
教諭 福本（ふくもと） 貴史（たかふみ）さん
平成20年3月
中等教育教員養成課程 技術専攻卒業

教員は特殊な職業

私は長年の講師経験を経て、昨年、教員採用試験に合格しました。講師をしている中で様々なことを学び、また、経験することで、教員の生活に随分慣れてきました。その講師経験を振り返ると、1年目は特別に感じました。大学生の穏やかな生活から突然教員生活が始まります。何もわからない新人教員であることは当然であり、教科指導・生徒指導のテクニックなど持ち合わせていません。車の運転では、初心者マークをつけることができます。しかし、生徒たちにとっては、何歳であれ、何年目であれ、目の前に立たれれば教員です。生徒を前に言い訳するとこなどできません。医者は選べても、教員は選ぶことができない。だからこそ私たち教員の仕事は特殊なのかもしれません。

宿泊学習

他教員との連携も

何もわからない1年目は、諸先輩方を頼りましょう。きっと大きなヒントをいただけると思います。なによりも、教職員はチームワークが大切です。もし、あなたが問題を一人で抱え込み、間違った対応をした場合に迷惑をかけるのは、その学年の先生や管理職の先生だけでは収まらないかもしれません。とにかく、大事にしてほしいことは、「報告・連絡・相談」の「ホウ・レン・ソウ」です。そこで、多くのことを学び、頼られる教員となってください。

生徒と向き合う

生徒指導で大切なことは、生徒と向き合うことです。単純に怒るだけでは、向き合っているとは言えません。また、その関係性では指導もうまくいかないことが多いと感じます。その生徒のことを考え、叱る・怒ることができる教員になって欲しいと思います。なによりも私は、それこそが教員のやりがいだと感じているからです。向き合った分だけ、その後の楽しみがあります。

授業風景

教員を志す福教大生へ

教員はきつい?楽しい?　巷では大変な職業だと言われていますが…。それ以上の魅力があると思っています。ぜひ教員となりその魅力を自分で探してください。

女子寮と男子寮に学習室が整備されました

平成26年度に、学生の生活・学習環境の充実を図るため、女子寮と男子寮の一部改修工事が行われ、それぞれの寮に学習室が整備されました。個別の机での学習のための部屋、長机を使用して友人と協同的に学びあう部屋、机や椅子を置かず、書道の練習や教材づくりなどの制作活動ができるように計画された部屋などが整備され、学生の多様な学びに対応しています。

今年度10月に実施した学習室の利用に関するアンケート調査では、ほとんどの寮生が学習室を利用したことがあり、学習環境によい影響があると回答し、「涼しくて静かな環境で学習が捗る」、「同じ課程の友人と一緒に勉強することでモチベーションが上がった」などの意見が多く寄せられました。

また、アンケートでは、「模擬授業や卒論発表の練習のためにホワイトボードや黒板、プロジェクターが欲しい」「机のある部屋を増やしてほしい」などの要望があがっており、今後もさらによりよい学習環境の改善を行います。

学習室（女子寮）

制作活動など様々な活動に利用できるよう配慮された学習室（女子寮）

学習室（男子寮）

表紙モデルの福教大生☆

今号の表紙には、2015年7月にロンドンで開催されたフライングディスク競技「アルティメット」の世界大会「WFDF2015世界U−23アルティメット選手権大会」に、日本代表選手の一員として出場し、見事優勝を成し遂げた赤澤加奈さんにご登場いただきました。

小学6年生の時にアルティメットを始めた赤澤さんは、長身を生かしたディフェンスが持ち味で、世界大会では主力選手として全試合に出場し、日本チームの優勝に大きく貢献しました。

今回の世界大会を経験し、「勝つこと以上にスポーツマンシップの大切さ、スポーツは世界を繋ぐものだということを学びました」と赤澤さん。「試合後には、対戦相手の選手と笑い合って交流をし、世界各国の選手と友人になれました」と嬉しそうに語ってくれました。

将来は小学校の教員を目指す赤澤さんは、勉学に励む傍ら競技を続け、「日本を含めたアジアの国々が世界大会の決勝で対戦する日が来ることを夢見て、これからも普及活動に力を入れていきたいです」と語ってくれました。

赤澤（あかざわ）　加奈（かな）さん
初等教育教員養成課程
美術選修3年

キャンパスからの便り Campus letter

健康科学センター

MESSAGE No.110 2015秋号

今回の内容は、「振り返って思うこと」、「父を送って51年」、「自分を知る～内観～」、「夢を愉しむ」、「色」、「ヤギの除草活動!!」、「体温の話」など盛りだくさんです。また表紙は初等美術選修の松尾歩美さんのデザインです。是非手にとってご覧ください。

健康科学センターHP
http://ww1.fukuoka-edu.ac.jp/~hokenctr/index.html

お知らせ

美術科学生による展覧会を開催します!

「赤馬展」(福岡教育大学3年美術科学生展)
会期:平成28年2月2日(火)～2月7日(日)
9:00～18:00(最終日は16:00まで)
会場:北九州市立美術館　黒崎市民ギャラリー
(〒806-0021 福岡県北九州市八幡西区黒崎3丁目15-3)
料金:無料

福岡教育大学美術科3年生による制作発表展です。各学生の専門性を生かし、絵画、彫刻、工芸、構成デザイン、美術教育など幅広い分野の作品を展示します。寒い時期ですが、皆様のご来場をお待ちしております。

お問い合わせ先
福岡教育大学芸術課程3年　前田(090-5255-1209)

後援会

平成27年度保護者説明会のご報告

今年度の県外での保護者説明会は、6月6日の佐賀から始まり、鹿児島、宮崎、山口と行いました。大学より就職、履修、学生生活についての説明の後、学年毎に分かれての茶話会をしました。茶話会では保護者の情報交換や質問があり、参加者にはとても好評でした。

来年は、長崎、熊本、大分、広島と計画をしています。ぜひご参加ください。

後援会事務局
TEL･FAX: 0940-33-8070
e-mail: kouenkai@eos.ocn.ne.jp

学生広報スタッフ大募集

大学や学生情報のアイデア提供、広報誌の取材･写真撮影、ポスター･ホームページのモデル、大学ホームページのモニター、制作への参加、その他大学の広報活動全般に関わってみませんか?

詳細は担当者までお気軽にお問い合わせください。

●応募方法等

メールで、本文に以下の3項目を記載の上、応募してください。

1.所属･学年
2.氏名(ふりがな)
3.連絡先(電話番号･e-mail)

受付後、こちらから連絡します。
なお、応募者多数の場合は、選考の上、結果を連絡します。

●応募先･問い合わせ先

経営政策課　梅田
TEL. 0940-35-1205
e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp

福岡教育大学の魅力を高校生･受験生をはじめ、地域の皆さまに知ってもらうために、広報･広告活動にボランティアとして参加･協力してくれる福教大生を大募集!
みなさんの応募をお待ちしています!

Joyama通信 vol.34

福岡教育大学
イメージキャラクター
フッキー

福岡教育大学広報誌第34号
2015年11月30日
編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学
経営政策課

〒811-4192　宗像市赤間文教町1-1
TEL.0940-35-1205
FAX.0940-35-1259
e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp
ホームページ:
http://www.fukuoka-edu.ac.jp/

携帯電話サイト　Twitter　YouTube

編集後記

■特集1では、平成28年度入学生を対象に実施する新たな入学者選抜について紹介しました。
本学では、教員になりたいという若者の背中を押すとともに、教員養成大学の広域拠点をめざして、九州・沖縄地域への貢献度を高めていきます。
教員を目指すみなさん、本学は教員になりたい人にとって最適な大学です!ぜひ本学で教員になる夢を叶えましょう!

（広報編集部）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。